林木遺伝子銀行110番
ー貴重な樹木の苗木の里帰りー

宝珠（ほうじゅ）のように松ぼっくりが鈴なりにつくクロマツ

林木育種センターの「林木遺伝子銀行110番」の里帰りシリーズ第５弾です。一つ目は、岩手県陸前高田市の華蔵寺（けぞうじ）にあった「華蔵寺の宝珠マツ」です。この木は、通常のクロマツと異なり、新梢（しんしょう）の基部に雌花が雄花のように集まって咲きます。そのため、球果（きゅうか）が鈴なりに数十個ひとかたまりにつく様子が（写真1）、仏様の持ち物である宝珠を連想させることからこの名前で呼ばれ、国指定天然記念物に指定されていました。大正15年頃に植栽された原木は、樹高19mにまで成長していましたが、平成29年に枯死したことから、東北育種場が保存していたクローン個体から平成30年につぎ木に用いる枝を採取し（写真2）、つぎ木増殖により後継樹を育成しました（写真3）。育成にあたっては植樹の際に根を傷めないように、そのまま植え付けられる生分解性のポットを使用しました。令和２年６月25日、華蔵寺において里帰りが行われ、地域の関係者の挨拶の後、原木があった場所への植樹が行われました（写真4、5）。華蔵寺の畑山（はたやま）住職は、「まずは元気に育ってほしい」と今後の成長に期待していました。「華蔵寺の宝珠マツ」が、地域のシンボルとして元の姿へと順調に成長することをわれわれも願ってやみません。

（林木育種センター東北育種場・井上 晃）

1 宝珠のような鈴なりの雌花、2 親木から採取した穂木、3 つぎ木苗 、4 華蔵寺の住職らによる植樹、5 元の場所に植栽された宝珠マツ

初代歌川広重の「近江八景之内唐崎の夜雨」にも描かれたクロマツの子孫

一つ目は、滋賀県大津市の唐崎神社内にある「唐崎霊松」です。初代霊松は633年、二代目は1591年に植樹され、いずれも枯れました。琵琶湖のほとりに堂々と立っていた二代目霊松は、近江八景「唐崎の夜雨」として様々な絵に描かれています。現在の霊松は、二代目の種から育てた苗が1887年に植えられた三代目ですが、平成29(2017)年頃から樹勢が急激に衰え、樹高10m・東西の枝張り25m・南北の枝張り27mの大木は半分の切断を余儀なくされました(写真1)。そこで、貴重な唐崎霊松の遺伝子を将来に残すため、平成30年6月に唐崎神社の本社である日吉大社から関西育種場へ林木遺伝子銀行110番の利用申請がありました。三代目霊松から枝を採り、つぎ木増殖を行い育成した苗木は(写真2)、神職らによって本年2月に再びその近くに植栽され(写真3)、現在順調に生育しています(写真4)。関西育種場は、林木遺伝子銀行110番により令和元年度末までに95件の里帰りを行っています。

(林木育種センター関西育種場・山本 あゆみ)

1 三代目「唐崎霊松」、2 里帰りしたつぎ木苗樹、3 神職らによる植樹、4 後継樹の現況

「林木遺伝子銀行110 番」の利用については、
森林研究・整備機構森林総合研究所林木育種センターホームページの「遺伝資源の収集・保存・配布」
URL https://www.ffpri.affrc.go.jp/ftbc/iden/index.html をご覧いただくか、
遺伝資源収集係(林木育種センター Tel.0294-39-7000)にお問合せ下さい。